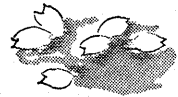


遊びをめぐる夢想(その一)

—「始まり」を探る—



本 田 和 子

「遊びの始まり」について思いめぐらそうとするなら、そこにはさまざまな視点が成立し得るであろう。たとえば母親の眼は、乳を飲むことよりも乳首をしゃぶることを楽しんでいる赤ん坊の姿に、遊びの最初の相を見出すかもしれない。

そして保育者は、次のような場面に遊びのスタートを見るだろう。たとえば、保育室の一隅で、身体を固くしたまま動こうとしなかった一人の子どもが、他の子どもたちのある遊びの上に視線を止め、それに引きつけられ注視するとき、保育者は、彼も間もなく遊び始めるであろうしをそこに読むのである。

前者は、個体としての人間がいかに遊び始めるかという視点であり、後者は、ある状況の中で一人の幼児の遊びへの取

りかかりをとらえようとする視点である。雑な言い方が許されるなら、前者はいわゆる発達のな把握、後者は保育的アプローチと言い得るであろうか。



ところで、民俗学者柳田国男氏の視線は、いま身近に見出される子どもらの遊びをさかのぼって、その奥に、遠い時代の「聖なるもの」の姿を探り当てている。すなわち、むかし、神と人が交わりを持つ場であった神ごとの中に、「遊びの始まり」を見るのである。

『こども風土記』その他に収められた氏の見解は、遊びの始まりに関して興味深い多くのことがらを示唆している。

ここでは、それらを手がかりとしながら、私の夢想をひろ

げてみたいと思う。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
「ままごと」、多くの女たちにとって、これほどなつかしく普遍的な遊びが他にあるだろうか。もちろん、男の子が「ままごと」をしないと言うのではない。男の子もまじって、時には男の子だけで、「ままごと」に熱中し打ち興じている姿は、幼稚園などではしばしば見られるところである。

しかし、私たち女にとっては、「ままごと」は単なる魅力的な遊びの域を超えているのではないか。それは、己れらの過去に刻印されたぬぐい去ることの出来ない歴史の一コマなのである。子ども時代をいどつた「ままごと」と、その楽しさが思い出されるとき、女たちは、お互いの過去を共有することができる。それぞれが知り合うこともなく、別々に過ごしてきた時間が、いま、ここで出会い、共通のものとなるのである。

主婦役の子どもの「ゴハンですよ」と言うあのかん高い呼びかけ、「ゴメンタダサイ」とむしろのはしに立つ来訪者、そして皿の上に並べられる草の葉や花びらのご馳走。Aの追憶に浮かぶままごとの皿には、いつもコスモスの花びらが盛られている。Bの得意の料理は、柿の葉にのせた砂の打ち菓

子だ。Cはいつも、台所から貰ってきた白菜の小片や大根のしっぽを、コトコトとぎさんだものだ。

それぞれに思い出される場面は異なっている、あのむんむんとほせてくるような楽しさや、ひそやかな成長感で胸のふくらむ思いは、すべての女たちに共通しているのではないか。「ままごと」は、それこそ、人の成長の歩みの中で、「女の始まるとき」と言えるかもしれない。

子どもが「ごっこ遊び」を好む理由は、身近な大人の生活との関連でさまざまに説明されている。しかし、彼女らが見聞する母親の生活行為にも、多くの種類があるであろうに、その中で、「炊事」と「接待」の部分がかくも大きく取り出されて、熱心に遊ばれるのはなぜなのだろうか。「ままごと」の好まれ方は、「洗濯ごっこ」や「掃除ごっこ」の比ではないのである。

柳田国男氏は、「ままごと」と同義の方言を集めて、そこからこの遊びの起源を探ろうとしている。たとえば、「ママゴト、マンマンゴト」などは「食事ごっこ」の意であるが、「ヨバッコ、オフルマイゴ」などの呼び方があるところからみて、来客の饗応をこの遊びの主要な要因と考える。そして、この饗宴の主要な人物が「オバサマ」すなわち主婦であ

るところから、「オバゴト、オバナゴ」という呼称も生まれているとするのである。

「ママゴト・オバゴト・オフルマイゴ」すなわち、炊事をして、主婦役の子どもが中心になり、他家に配ったり来客をもてなしたりすること、これは常民の日常の食事の模倣とは考えにくい。その原型は、改まった公式の食事、特別な日の炊事と饗応であつて、そのおもしろさが忘れられず、折々にその形を擬した遊びがくり返されたのであろう。

氏は、公式の食事とは、「盆かまど」のような精霊飲の儀式とみる。お盆や三月の節供に、川原などの屋外にかまどを築き、火を焚き炊事をして、むしろの上でそれらを食べる。こういう少女の集まりが、あちこちから報告されている。天竜川筋の雛送りや、秋田の「かまくら」などには、ごく最近までその名残りが見られた。

これら少女たちの屋外の炊事は、古い時代には、精霊や無縁仏を供養し、食事を饗応して、つつがなく送り返すための行事だったのである。柳田氏によれば、「盆は目に見えぬ外精霊や無縁ほとけが、数限りもなくうろつく時である故に、これに供養をして悦ばせて返す必要があつたと共に、家々の常の火常の竈かまどを用いて、その食物をこしらえなくなかつた。

それが門・辻・川原等に、別に臨時の台所を特設した理由であり、子どもはまた触穢の忌に対して成人程に敏感でないと考えられて、特に接待掛りの任に当たつたものと思われる」ということである。

もちろん、「ままごと」の起源をこれら「神ごと」にあるとみなす実証的根拠はない。それに精霊飯のような行事の発生する以前から、子どもらは「ままごと」的な遊びを楽しんでに相違ないのである。したがって、時間的な意味で「遊びの始まり」をとらえようとするなら、柳田氏の見解は必ずしも適用し難いであろう。

しかし、身近な大人たちの日常を同化して遊ぶ中で、とりわけ「ままごと」が、ここまで深く定着し、時代を超えて愛され続けたのは、それがやはり、人間性の根源とかかわる「何か」と結びついていたのであつたか。そして、それをしも「聖なるもの」と呼ぶとすれば、「ままごと」は「聖なるもの」に根ざすものなのである。

自然物をそのままではなく、口に運びやすい形に整えること、それは、人の文化の根源に基礎づく営みの一つであろう。しかも、心をこめて煮炊きしたそれらをまず神に捧げ、あるいは神と共にそれを食すことで、己れらの肉体の霊の糧

となすのである。柳田氏によれば、節供とは「ハレの日(祭りの日)の食事」の意であるとのことである。すなわち「供とは共同食事、神や祖霊と共に総ての家族が相饗することであり、節は即ち折目、改まった日ということであった」

「ハレの日の食事」とは、必ずしも材料の上下によるものではなく、その調整のために費される労力の量で決まるものであった。それゆえに、その「ハレの日の食物」の生産と分配をつかさどる女性の役割は大きかったのである。そして、この「聖なる仕事場」となる家々の台所は、女の子にとって魅力的な禁忌空間であった。とりわけ、火をいじめることは、子どもには禁じられていた。しかも、彼らをとらえてやまな心躍る出来ごとなのである。

それゆえに、この「聖なる仕事」を子どもらになうことのできる精霊飲のような行事は、どんなにか魅惑的であったろう。この日こそ、日常禁じられていることから、常から憧れ続けていた「炊事と饗応」を公然と実行できるのである。その上、大人たちは、水を汲んだり、材料を運んだりして、かげの助力を惜しまない。何しろ、大人たちは、無数の霊が無事に他界へと立ちのいてくれることを祈り、そのため、子どもらがその役割を果たしおおせるよう願っているの

だから。

こうして、子どもらは、人の生き方の基本にかかわる「聖なる仕事」に、正式の参加者としてみずからも加わり、その業を己れの肉体に刻印する機会を持った。そして、自身にきざまれた「ハレの業」は、その魅力のゆえに「ケの日(日常的な毎日)」の生の中にも再現されることを欲した。すなわち、遊びという虚構の次元において、くり返し、くり返し展開されたのである。

霊を畏れる人々にとって「聖なるもの」を俗の時間の中に写しとって相対化させることは、許され難い不敬事のはずである。なぜなら「聖なるもの」がその絶対性を失うことは、「神の死」を意味するからである。

しかし、子どもらがこの神と人の交わる「聖なる時間」を写しとり相対化させるときにのみ、人々は、ほほえんでそれを許すことができたのではないか。子どもとは、聖と俗の中間に位置する存在、時としては、「神に代って」その聖性を具現することさえ可能な、「神に近いもの」なのだから。子どもだけは、その自らなる聖性のゆえに、不敬の祟りを恐れることなく、「神ごと」を擬すことができたのであった。

しかも「遊び」は、日常性の遮断されたところに出現する

非日常的な生の様式である。「ケの日」に流れる俗なる時間と、庭の片隅、あるいは日溜りの縁側などという「ケの空間」を用いながらも、そこに特別の時空間を成立させ、そこで展開される行為なのである。そのゆえに、「聖なるもの」と対立するのでなく、むしろ、その聖性をすら再現可能な特別の場として、日常の生の中に位置づいたのであろう。

そして、それを見まもる大人たちの眼は、単なる許容の域を超えて、あたたかく慈しみに満ちていたのではないかな。なぜなら、幼い彼女らが、長じて後に引き継ぐであろう家の光としての役割を、遊びの次元で、いそいそと果たしているあどけない姿は、大人たちの胸に、未来を照らす明るい灯をともしせたに相違ないからである。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
彼女らの模したのが、「ハレの日の炊事」であるとすれば、それは手数をかけ、心をこめて調整されるべきものであった。「ケの食事」は、副食物などあまり手のかからぬものを一度に多量に整え、それを毎日食べるといった形で、時間も労力も費さぬことを旨としていた。しかし、「ハレの食事」は、「シナガハリ」を数種用意しなければならなかった。それらはいずれも多分の準備を必要とするものであった。その

典型的な例が酒であらう。

したがって、子どもらが再現した「ままごと」の炊事も、あれこれの材料を用いてできるだけ丁寧に調えられねばならなかった。そして、それら美しく盛られた品々は、訪問客の前に並べられたり、近所の家々に配られたりして、多くの人をもてなす糧となった。このとき、主婦役の子ども、すなわち調理者は、他者を饗応する喜びと誇りに心を躍らせたのである。

こうして、「ままごと」は女の子の生き方の中に定着していった。「聖なるものとの交わり」という根源性のゆえに子どもらの魂を動かし、通常は禁じられていることのゆえにそれに魅され、加えて、「神ごと」に参加できた喜びのゆえに、それらを「遊び」の次元で再現した。しかも、その遊びは、大人たちに禁止されるどころか、逆に彼らを楽しませたのである。その結果、幼女たちは、「ままごと」という伝統的な遊びに加わることに於いて、常民の歴史の中に「女の始まり」を刻したのであった。(お茶の水女子大学)

〈参考文献〉

柳田国男「こども風土記」「童児の昔」「小さき者の声」
「神に代りて来たる」「餅と臼と搗鉢」など。